得意分野への取り組みを通して、自己肯定感を獲得し登校が実現した事例報告　【町田市立Ａ中学校の取組】

不登校生徒の状況

小学校の頃から登校しぶりが見られた生徒である。入学後も登校できなくなり、1年次は98日欠席した。ひとり親家庭で兄も不登校である。自身の好きなこと（運動）に対しては意欲がわくが、そうでない場合には全く気が向かない様子である。

具体的な取組

【連絡は定期的に行う】

定期的に連絡を取り合う。生徒とのつながりを維持し、行事についての連絡を入れていた。

また、生徒の興味のある事柄についての話題を共有し、生徒との関係を維持し続けた。

【興味のある事柄で登校を刺激する】

昨年の年度末に球技大会の実行委員を経験し、大会の成功に尽力したことやその時の頑張りや取り組みの過程について賞賛したことで、強い達成感を味わうことができた。もともとスポーツや行事が好きな生徒であった。

【運動好きな部分で登校を刺激】

２年生になり、運動好きな部分を刺激し、「体育祭実行委員を経験してみないか？」と、体育科が説得した。本人の「やってみようかな」の小さな気持ちを大きく引き出した。そして、クラスで２名しか選出されない体育祭実行委員に立候補し仲間に選出された。当日までの活動に責任をもって取り組み、クラスのみならず学年にも貢献した。

【成功体験をエネルギーに】

体育祭実行委員を担い、クラスの勝利に貢献できた成功体験をエネルギーにし、登校意欲が高まった。体育祭以降も登校は続いている。引き続き、声掛けや励まし、落ち込んだ時のケアなど行っている。

成果

１年次は98日の欠席日数であったが、２年次は、10月末日時点で、22日の欠席日数となり、かなり減少した。今までの行動パターンは受け身であることが多かったが、自ら意欲的に行動することが増えてきている。また、表情も明るくなった。

課題

98 日から 22 日へ欠席日数が減ってはいるが、またバランスを崩しかねないのでしっかり見守っていく。

コロナ感染不安による不適応生徒（コロナ感染症罹患後の精神的な不穏状態）ついて

【町田市立 B 中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、コロナ感染症罹患後、周囲への過敏さが増し学校適応も悪くなった。不安が高まり強迫症状も出てきており、ルーティーン化された生活を崩せない状況である。（例：自宅では 17 時に入浴するため、帰宅しても標準服のまま数時間、脱衣所に立っている。）

具体的な取組

・本校では、毎週金曜日に管理職、不登校対応加配教員、特別支援コーディネター、スクールカウンセラー、養護教諭、各学年教育相談担当をメンバーとした特別支援委員会を実施している。ここでは、情報交換や具体的な方針を協議し、不登校生徒の支援に当たっている。

・特別支援委員会では、本校独自の資料に基づき大きな変化があった生徒を中心に状況や方針、具体的な支援策について協議・確認が行われ、組織的な対応に取り組んでいる。

・年間の特別支援委員会の予定をきめ細かく企画し、臨機応変に※ケース会議を組み込むなど、生徒の実態に応じた組織的な支援体制に取り組んでいる。また、学期に１回、SC、SSW、子家セン、児相、民生児童委員が集まりチーム学校として情報交換を行っている。

※ケース会議では、SC や SSW と協働して資料を作成し、専門的な見地からケース理解、適切なアプローチや支援策を見出している。

例：「コロナ不安による精神的な不穏」を主訴とした緊急を要するケース会議など

ケース会議の「コロナ感染症罹患後の精神的な不穏状態」適応生徒の取組

・現在（11/４）、登校している状態（脅迫症状）を解消するため、早急に発達診療クリニックへの受診を SC 及び養護教諭が進める。

成果

・医師より、不安障害、自閉症スペクトラム障害との診断を受け、投薬を行いながら、現在のルーティーン化した生活をもう少し柔軟にしていけるように取り組み始めている。

・登校刺激を与えない方向で共通理解がもてた。

課題

・毎週の「不登校生徒の状況」やケース会議の資料作成など、教員の過重負担が最も大きい課題である。

不登校生徒支援について居場所づくりのために
【町田市立Ｃ中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、本校入学後、数日は登校することができていたが、その後、徐々に学校に来ることができなくなった。学習的な支援が必要であるとともに、兄弟も不登校傾向にあるため、学校へ行こうとする意欲があまり見られない生徒である。

具体的な取組

別室登校をした際、本人の好きな卓球をする時間を作り、少しでも「楽しい」と思える空間を作った。もともと体を動かすことが好きな生徒であったため、卓球を通して、普段は見せない、活発な様子や、本音を聞き出すことができた。

家庭訪問を行い、プリントを届けることにより、日々の学校での活動との接点を作った。「学校では何をやっているのか」「自分は学校に行けていない」というような不安な気持ちや罪悪感が少しでも和らぐよう、「自分のペースで大丈夫」と声掛けをし続けた。

毎週１回開催している特別支援部会にて、生徒の情報を交換するとともに、より学校に来ることが楽になるよう、話し合いを重ね、アプローチを考えた。また、加配教員をはじめとし、別室に来ることができたときは、SCや養護教諭、学年の教員が声掛けを行った。

別室に登校することができた際、クラスメイトと接する機会を作ることにより、少しでも、教室に足を運ぶことが楽になるようにした。

成果

もともと学校に来ることのできなくなっていた生徒であったが、３学年の９月末段階では、37日学校に来ることができている。早退、遅刻はあるが、別室にきて、少しずつではあるが、学習をすることができている。

課題

１人の指導に割く時間が多くかかってしまうため、教員不足により、全ての不登校生徒に対してのアプローチをすることは大変厳しい状況である。また、すぐに結果の出るものでもないため、教員側も根気よく、声かけやアプローチを継続していく必要がある。また、これを加配教員だけでは困難なため、全教職員で協力して行っていく必要がある。

生徒個々の実態に寄り添った支援について
【町田市立Ｄ中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、現在３年生で、１年生の初めは、新型コロナによる学校の臨時休業によりなかなか登校できない日が続き、ようやく学校生活がスタートしたところで、学級での生活が難しくなり、２年生からは登校できない状態となった。

具体的な取組

◎スクールカウンセラーとの面談

悩みを相談したり、先生には話しづらいことを話したりが、スクールカウンセラーとはできている。また、面談をするために週に１度は登校する機会となり、学校という場が本人にとって苦手な場、つらい場ではないようにしていく。カウンセラーと担任との連携を密にしており、共通理解が図れている。

◎オンラインによる授業参加

生徒は、一人一台のタブレットパソコンがあり、「Google Meet」というアプリを介して授業に参加することができている。必要に応じて発言や質問をすることができ、班での話し合い等も参加することが可能であり、友達との交流も深められる。

◎保護者との連携

不登校は保護者にとってもつらい状況となる。今回のケースでは、毎朝保護者が学校へ電話で状況を知らせてくれる。担任が毎朝保護者と対話することで、保護者に少しでも寄り添い、保護者の思いを共感できるようになる。

◎教員による日々のかかわり

本生徒は、１年生の後半から２年生の前半にかけて、技術科の作品作りに興味があり、カウンセラーとの面談後に技術科の教員が付き添って、作品作りに取り組んだ。後半からは疲れてしまったが、大変によい機会となった。

成果

学校に登校するまでには至っていないが、それでも自分の進路をしっかりと決めて、中学校生活を本人なりに取り組むことはできていた。担任の日頃の関わり、保護者との連携、スクールカウンセラーの役割など、不登校生徒への対応の一つの形になったように思われる。

課題

友達と多く関わったり、学びを深めたりするところまでは到達できなかった。学校が、本人にとって真の居場所となりうるために何が必要かを考えることが大切である。